②「キャリア教育とアクティブラーナー」



三重県立津高等学校
進路指導主事　笹山基起

はじめに

本校では、10年ほど前より「進学校におけるキャリア教育」という視点で学校改革が行われてきた。その展開の中で「学校の教育活動のすべてをキャリア教育」と捉え、授業改善や行事の見直し、それぞれの活動の意義や目的の再定義を図ってきた。本稿では、その経緯とそれらの実践について報告する。

1．津高校について

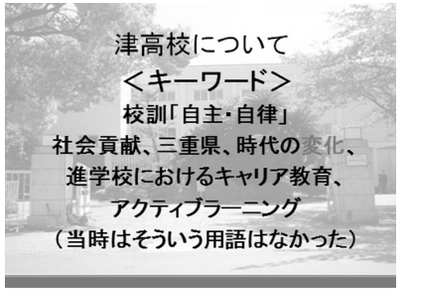
旧制中学を前身に持ち、創立137年目の地域の伝統校である。99%以上の生徒が4年制大学へ進学し、その多くは国公立大学である。校訓は「自主・自律」であり、目指す学校像を「高い知性と教養を持ったリーダーが育つ学校」としている。それを受け、進路指導部の目標は「自己決定に基づく納得のいく進路決定」としている。これは、リーダーに必要な資質は「状況を適切に把握し、主体的に的確な判断・決定ができること」と考え、進路指導を通じてその資質を養っていこうという考えからのものである。また、大学進学を最終ゴールとして捉えるのではなく、社会貢献のための手段として大学進学を捉えるように進路指導を行っている。

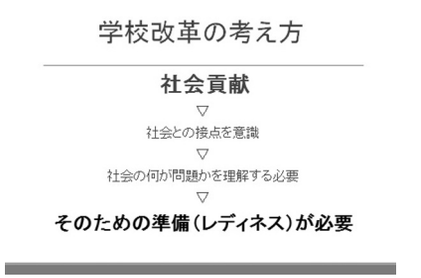
大学名	2016年度入試	2017年度入試
三重大学	74名	78名
名古屋大学	22名	15名
大阪大学	11名	13名
京都大学	13名	14名
神戸大学	10名	18名
東京大学	3名	5名
同志社大学	69名	63名
立命館大学	113名	71名
医学科（国・私）	17名	10名
国公立大学　計	230名	222名

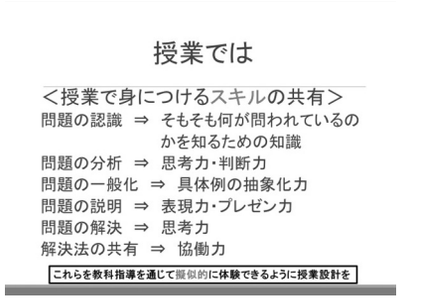
2．学校改革の経緯

「進学校にありがちな進学実績のみをアピールするだけでは特色がなく、これからは生き残れない。」という危機感が10年ほど前に本校で生じた。その直接の原因は学区の事実上の全県１区化と少子化による生徒の獲得競争の激化である。そのような外的環境の変化の中、本校は、旧制中学以来の本校に課せられた使命である「社会貢献」とそれに対する「県民からの本校への期待」を再認識し、そのための教育活動として何が求められるのかを議論した。そして、「学校の教育活動のすべてをキャリア教育」と捉え、社会貢献のためには「社会との接点を意識」できるような教育、さらにそのためには生徒が「社会の現状を理解できる」ための準備が必要、という結論に達した。

これを受け、学校の教育活動の大半を占める「授業」と「行事」の見直しを図った。「授業」では、「授業で身につけるスキル」を学校で共有し、３年間で体系的に自然と身につくような授業改善を目指した。その結果として自然と本校では「講義」「思考」「議論」「共有」「発表」といったプロセスを授業で取り入れているようになった。今でいう「アクティブ・ラーニング」であろうが、当時はそのような用語は普及しておらず、意図してそれを導入したわけではなかったが、自然とこのような授業展開になっていった。もちろん、各教科・科目の特色もあるので、一律に表面上の「型」を決めているわけではない。先に述べたような「スキル」を身につけられる授業スタイルであれば何でもよいとしている。



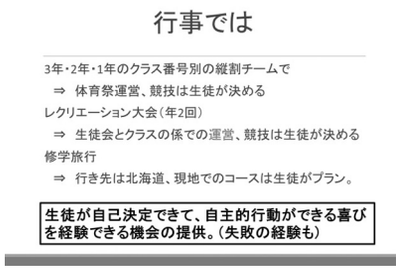






「行事」もその目的・目標を再定義し、見直しを図った。本校の行事は、伝統的に生徒会が中心となり自主的に運営を行っていたので、その伝統を

ベースに教育活動の質を高めるという方向性で改善が行われた。その中では「失敗も必要」と考え、教師が全てをお膳立てするのではなく、生徒達で自己決定でき、自主的な行動ができることの喜びを経験させることが大切という認識に至った。



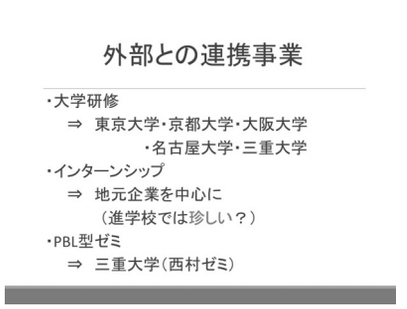
例えば、修学旅行では、日時と場所は学校で決めるが、具体的な活動内容などは有志の修学旅行係が企画し、旅行業者と調整をしていくという形を取っている。時間は掛かるが生徒達の満足度は大変高いものとなっている。

体育祭でも、運営は生徒が行っている。招集や記録など、手間取ることも多く、終了時間が延びることもあるが、それも「意味ある失敗」と前向きに捉えている。他の行事も似たような形態を取っており、教員側は進捗具合などにヒヤヒヤすることもあるが、じっと我慢して生徒達の成長を待つことを心がけている。

自分たちで決めたことには自分たちで責任を持つ、という自己決定の意識の醸成につながっていると考えている。

3．外部との連携

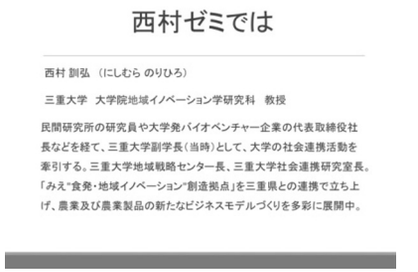
学校の改革は「授業」と「行事」の２本柱で行われたが、それらだけでは学校という狭い世界の中の活動で終わってしまうのではという懸念があった。幸いにも、本校は、当時からSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業の指定を受けており、外部との連携の環境がすでにあった。本校で人気の進学先の先生の授業を受けられたり、研究所を訪問したり、実験船に乗れたりといった経験ができるものである。このすでにあった環境を生かし、外部との連携事業を再整理し、キャリア教育の枠組みに位置づけるという再設計を行った。今までは各部署が単独で行っていた行事を「キャリア教育」の視点で組み直し、3年間のキャリア教育プランとして再生したわけである。これにより、「授業」「行事」「外部」の三つの枠組みの連携ができあがり、それぞれが有機的に結びつき、単なる机上の学びだけでなく、将来、自分自身の姿、そして社会貢献を意識した教育活動が本格的に実践されていくこととなった。

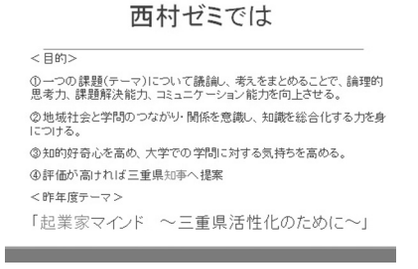


本校では伝統的に大学入試における受験校は「生徒の自主判断」に任せている。こちら側から受験に必要な事務的な情報、そして生徒の成績に関する情報などを提供しアドバイスを行い、最後は生徒に判断させるという進学指導である。その中では、「合格できる大学」よりも「行きたい大学」を意識させ、なぜ「そこに行きたいのか」、そのためには「今なにをすべきか」を徹底的に考えさせることにしている。周囲の言われたとおりの受験では物事に「受け身」のまま社会に出ることになり、自らの選択に自己決定という意識が持てないようになるのでは、と考えているからである。外部との連携の強化により、生徒の将来設計の視野が広まり、それにより「行きたい大学」意識は昨今さらに強まっている傾向にある。これらも広義の「アクティブ・ラーニング」と考えている。

4．津高キャリアプロジェクトについて

外部との連携では、PBL型の形態にも着目した。アクティブ・ラーニングとは、もちろん教科科目の中で活用されるものであるが、本来はそういった枠にとらわれない学びの形態のはずである。そこで本校は、産学連携に取り組まれている三重大学の西村訓弘先生（地域イノベーション学研究科）に協力をお願いし、大学生が受講するようなPBL型のゼミ形式の活動の機会を校内に設けた。津高キャリアプロジェクト（通称：西村ゼミ）というものである。





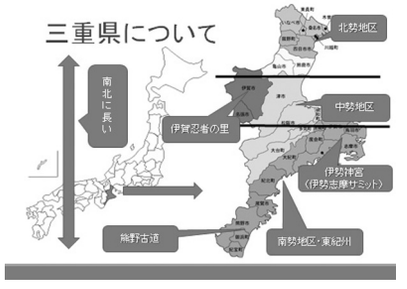
このゼミでは、大きなテーマを設定し、それに基づき生徒達が自主的にアイデアを出し、西村先生にプレゼンを行い、評価してもらう、という活動が行われる。そして、西村先生からのアドバイスを踏まえて、次回のゼミに向けて自分たちの作り出したアイデアを改善していき、完成度を高めていくという作業を繰り返していく。まるで、大学や大学院で行われているようなゼミである。

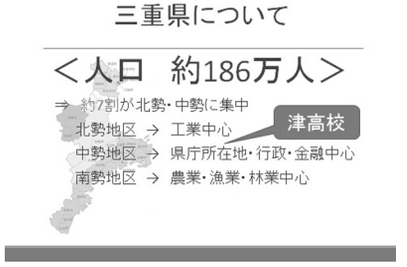
このゼミの基本理念は、①三重県について考える、②地域の活性化、③学問と社会との結びつき、の三点である。

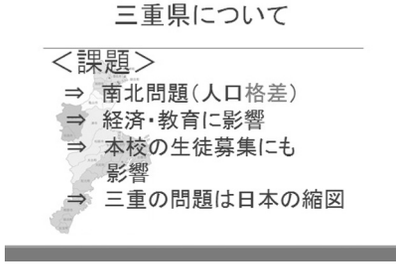
生徒達は案外自分の地元のことを知らないものである。まずは三重県の特徴を押さえる活動から始まる。昨年度のテーマは「起業家マインド　～三重県活性化のために～」である。これは一昨年度のテーマ「Uターン学生に選ばれる三重」の続きである。一昨年度のゼミでは、県内の学生が大学進学を契機として県外へ流出する最大の原因は就職問題である、という問題提起がなされ、そのための解決策がゼミでの議題だった。　そして昨年度は、就職が問題になるのなら「自分で起業すればいいのでは？」という議論の展開になったのである。

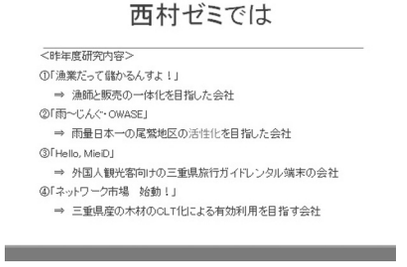
そこで、昨年度は、三重の特色である「漁業」や「林業」、「雨」や「観光資源」を生かしたビジネスモデルを考えることとなった。生徒達は班に分かれて、「どうやったら地域のための会社ができるか？」「企業理念は？」「収益は？」「持続可能性は？」「ビジネスのターゲットは？」などといったことを考え、一つのビジネスモデルとして西村先生にプレゼンするといった活動を繰り返した。西村先生自身が起業の経験があるため、現実的な視点から適切かつシビアなアドバイスが頂けた。

また、調べていく中で普段気づかない三重県の良さが見つかり、将来「三重県に戻ってきたい」という意識が強まったという生徒も多く出てきている。





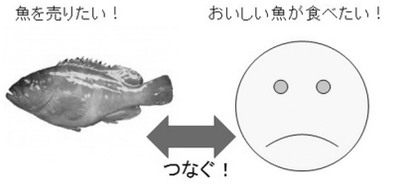




〈生徒の考えたビジネスモデル４選〉

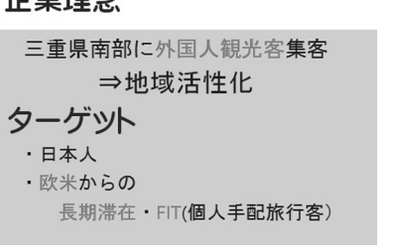
■「三重特産の鮮魚を専門とした移動型スーパー」

伊勢湾で取れる鮮魚を仲介業者を通さずに直接消費者にいかにして届けるかというビジネス。収益性と需要の面で苦労したが、地元スーパーとの連携というウルトラＣなアイデアで見事に完成。



■「雨量日本一という地域の自然を売りにするテーマパーク」

人口減少に悩む東紀州地域。しかし、熊野古道に代表される歴史的観光資源が多い。さらに、全国一位という観光資源「雨量」に着目し、ここでしか体験できない「雨」をテーマにしたテーマパークを発案。やはり「全国一」は商売になる。

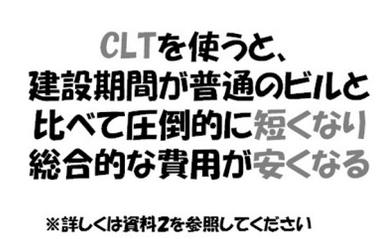


■「増加する外国人観光客のための三重県観光に特化したスマホ型端末」

伊勢志摩サミットを契機に増え続ける三重県への外国人旅行客。しかし南北に長く交通の便も良くない地域が多い三重。いかに安全にかつ便利に三重県を観光してもらうか、という視点でIT企業とタイアップする観光に特化したスマホ型端末を発案。利便性、収益性の面で実現可能性は高いとの評価を西村先生から頂いた。



■「CLT（クロス・ラミネイティド・ティンバー）を専門とする林業会社」



林業を衰退産業と捉えるのではなく、チャンスと考えたビジネス。「逆境をチャンスに」が起業の精神。CLT 製造装置のメーカーが三重にあるという利点を活かし、産地直送、コストの安い CLT ビジネスモデル。公共施設の利用から始めることで普及が見込まれると考え知事に売り込んだ。

これらのビジネスモデルの評価が大変高かったため、最終プレゼンとして三重県知事に発表する機会が頂けた。これは生徒にとって、自分たちの考えたビジネスモデルが外部での評価対象になるという滅多にない貴重な体験となった。写真は、そのプレゼンと鈴木英敬三重県知事への提案書の提出の時のものである。



生徒のアンケートからもこのゼミの効果が見えてくる。

■思考することにより自分の能力を「使い切る」ことが体験でき、このことの重要性に気づいた。
■身近な地元の知らないことにたくさん気づいた。
■ゼロから物事を考える難しさとその面白さに気づいた。
■県外に行くことばかり考えていたが地元に残りたいと思うようになった。
■元からあることに新しい要素を加えることの大切さに気づいた。
■地元の大学に行くにせよ、県外の大学に行くにせよ三重県を客観的にみる必要性に気づいた。知らないことを知ることで客観視できるようになった。

本校は卒業生の70%程度が県外の大学に進学している。このような状況を踏まえると、高校生の間に一度じっくりと地元のことを考え、その上で進路決定をするといった環境が必要ではないかと考える。将来県外に行くにせよ、地元に残るにせよ、また、一度県外に出てから戻ってくるにせよ、知らないことをそのままにしておくことは進路選択の上でマイナスに働くのではないかと思う。その意味では、この西村ゼミの効果は大きいと考える。

5．まとめ

以上が本校の取り組む「進学校におけるキャリア教育」である。成果としては、

■「社会貢献」が最終目標という意識は学校に根付いた。
■「受験を通じた人間教育」の視点の重要性が広まった。
■「視野の広い前向きな生徒」が増えた。

があげられる。具体的な数値上の結果があるわけではないが、普段の生徒との関わりを通じて職員が感じているところである。「キャリア教育」を実践していく上では、自然と「アクティブ・ラーニング」的な指導が必要になり、その結果、生徒は「自ら主体的に判断し、決定できる」資質を持った「アクティブラーナー」に育っていく。本校の校訓である「自主・自律」とは、つまるところこの「アクティブラーナー」ではないかと思う。自ら社会の課題を見つけその解決に挑戦し、そのために学び続けられる「アクティブラーナー」を育むことこそ本校の使命である「社会貢献」につながると考えている。「普通科の進学校」という位置づけの学校であり教育資源も限られている中、できる範囲内でできることを地道に行って、社会に貢献できる学校を目指していきたい。